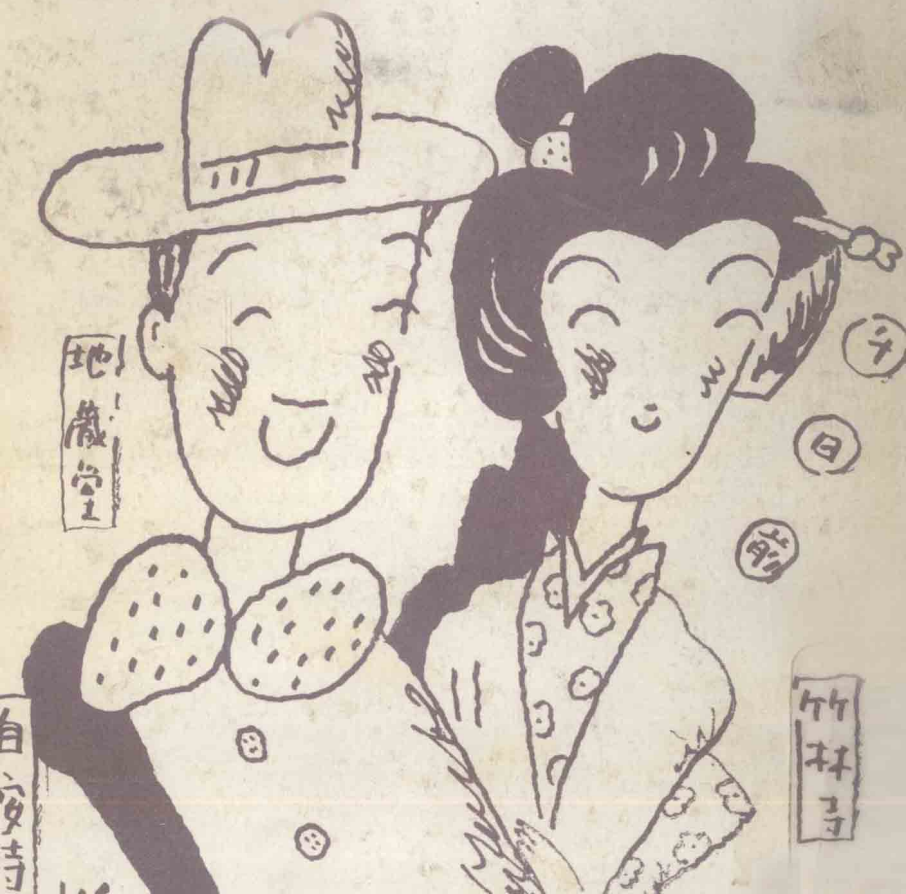


骨よ笑え

有明夏夫



有明夏夫



文藝春秋

骨よ笑え

昭和五十九年四月十五日 第一刷

定価 一〇〇〇円

著 者 有 明 夏 夫

発 行 者 西 永 達 夫

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 大日本印刷
製本 矢嶋製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

骨が騒ぐ……………	218
骨を踏め……………	155
骨は嘆く……………	103
骨に祈る……………	54
骨よ笑え……………	5

装幀 和多田 勝

初出掲載誌

骨よ笑え 別冊文藝春秋160号・昭和五十七年六月
骨に祈る 別冊文藝春秋161号・昭和五十七年九月
骨は嘆く 別冊文藝春秋162号・昭和五十七年十二月
骨を踏み 別冊文藝春秋163号・昭和五十八年三月
骨が騒ぐ 別冊文藝春秋164号・昭和五十八年六月

骨よ笑え

骨よ笑え

千日墓所

「おい重よ……」

外から戻ってきた義父の源兵衛が、店で白脚絆まははんの数を読んでいた重助に声を掛けた。

「へえ」

「ブンシが逝いってもたで」

唐突とうとつなので、なんのことやら判らなかつた。

「ブンシ？」

「咄家はなしかの文枝やがな」

「ああ、あのおっさんがだっか」

重助はさほど落とし咄に興味を持っていない。が、それでも桂文枝の名前ぐらいは知っている。借金で首がまわらなくなつて、十八番物の『三十石』を、島之内にある五龍田本舗の主浮田桂道に、百両で質入れした咄家だ。その後の寄席では、いくら客の注文があつても、絶対に口にしないので評判となつた。これを見かねた鰻谷うなぎやの三臓田の主吉野五連と、なんという名前だったか越後屋の主の二人が、金を出し合つて質受けしてやつたところ、感激した文枝は三十日間ぶつづけに『三十石』を読よんで、御霊神社内の丹岩たんいわの席を夜毎大人りにしてのけた。当時、重助は一度覗きにいったが、あまり

大勢の客が押し掛けたせいで、ほとんど聴こえなかった。源兵衛のほうは落とし咄が大好きなので、幾度も足を運んでいる。

「わしより二つ下や」

商売を離れた声だった。

「ああ、それでっか……」

五十六である。普通なら、まず不足のない齢といってよからうが、咄家は長命なものだそうだから、もうちよつと頑張ってもおかしくはない。もつとも人の寿命など、どこでどうなるか、判ったもんやないが。

「ほんで葬礼やがな……」

義父の声は山田屋の主の響きを取り戻していた。

「故人さんの遺言で、千日で焼くらしいわ」

「そら咄家やったら、埋めてもらうよりは、潔う灰になるほうがよろしやろな」

去年の七月、太政官は火葬を禁じて、土葬にせよとの布告を発した。仏教の悪習を断ち、神道の隆盛を計る、という趣旨からだと言いたが、このために千日墓所で働く者たちは大打撃を受けた。その上大阪府は、今月の末には墓所そのものを廃止して、天王寺村や岩崎新田へ移転するべく段取りを進めている。いよいよ商売は上がったが、このドサクサに乗じて、千日で茶毗に付す家がいくらか増えた。もともと、すべて土葬にせい、というのが無理な注文で、それだけの墓場を持った寺など、そう多くはないのである。だから、火葬の煙が時折立ち昇っても、府庁は黙認している。

「葬礼やるんは、印形寺や」

「そら、うってつけでんな」

下寺町の印形寺には、淨瑠璃語りや三味線弾きの墓が多い。俠客や角力取り、それに歌舞伎役者な

ども並んでゐる。そこに咄家が加われば、さぞかしにぎやかなこっちゃろ。

「鈴本の旦那さんに聞いたんやがな、えらい変わった趣向でいくそやで」

「へえ、どないしまんねん？」

「それはいま、弟子の連中が頭ひねつとるらしいわ」

「盛大にやりまんのか？」

「金をかけんと、盛大にちゆうこっちゃろ」

「『三十石』を質入れするぐらいやよつてに、金はおまへんやろなあ」

「せやけど、鈴本の旦那さんもえらい肩入れしたはるさかい、ちよつとした見物になるで」

「旦那さんにしたら、多少の身出しにはなつても、ええ宣伝ひょうでんになるつちゆう算段だつしゃろ」

「昼飯食うたら仙喜社へ行てな、旦那さんの指図を受けてきてくれ」

「へ」

店内の取り片づけを番頭の善七に任せた重助は、少し早目の中食を女中のたきに命じた。それを腹に詰めこんで茶を飲んでゐると、大きな腹をした女房のふさが、長女のみつを抱えたまま大儀そうにそばに坐った。

「お出掛けだったか？」

「うん、仙喜社へ行てくる」

「遅なりますのん？」

「きょうばかりは見当もつかんわ。遅なつたら、先に寝ててんか」

「へえ」

ふさは家付きの娘だが、おとなしい気性で、まず亭主に逆つたりはしない。もつとも、先々はどんなるか、判つたもんやないが。

みつの頭をちょっと撫でてから、重助は腰を上げた。長女は言葉にならぬ言葉を発して、父親を見送る。丁度可愛い盛りだが、この不景氣な時に二人目がでけたら、一体どないなんねやろ。真面目に考えてると、頭痛がしてくる。

「お早ようお帰りー」

丁稚の末吉は甲高い声を呑氣に張り上げる。その声に背中を押されて、重助はつんのめりつつ表へ出た。

外は春霞の上天氣だった。千日墓所の上を通り過ぎてきた穏やかな南風が、媚を売るように身にまとわりつく。屍体を焼く折の匂いは、ひとところに比べて嘘みたいに淡くなった。とはいえそれとでも、他所の人間には堪らんほど臭いらしいのだが。

正面入口の黒門も、竹林寺の墓場も、自安寺の土塀も、みんな柔らかな陽射しの中で眠りこけていた。門前の焼餅屋には客一人いない。右手の休足所といい、左手の首斬場といい、その向こうの観音堂といい、まるで役者の出ていない芝居の書き割りのようである。動く人影は、どこにも見当たらない。左手遙か彼方の灰山は、あれが人骨の捨て場所とは信じられぬほどに、にぶく輝いている。千日の墓所は、死の一步手前で、束の間の安息を貪っているかの如くだった。

西櫓町まで出たところで、「飛久」の人力車を攔まえた。近頃はこの手の便利な乗物が現われたので有難い。旧幕中なら、引手駕籠には乗れなかった町人も、いまは大威張りでふんぞりかえってゆける。文明開化とは結構なものだ。もともと千日墓所の廃止という大痛手からすれば、屁のツツパリにもなりはせんが。

しかし屁のツツパリでも、頭の使いかたひとつでは、大きな梃子になることが判った。そのいい見本が、鈴本の旦那さんである。

旧幕中、鈴本勇三郎は大坂と江戸に店を張って、大名行列方人足請負の元締を承っていた。屋号を

「大鈴屋」と称し、創業は延宝の昔に遡さかのぼるといふから、二百年の来歴を誇ってきたわけだ。御三家をはじめ、越前松平家、阿波峰須賀家などから扶持もつを頂いて、その羽振りたるや大変なものだった。大きな蹟つまずきがきたのは、文久二年である。幕政改革で、参勤交代の制度が変わったからだ。それまでは、藩主の在府と在国の期間はほぼ一年ずつとすべし、と定められていたが、年々權威の衰えてきた公儀は、三年に一度にて苦しからず、と譲歩してしまった。幕末の頃には、これさえ守らぬ大名がいったいいた。

公儀や大名たちは、それで苦しからずだったろうが、苦しくなったのは、道中奴や駕籠か昇きき連中である。三年に一度の参勤交代では、きちんとやってくれてさえ飯が食えないのに、それさえ途絶えるようでは、もはやなす術がない。転廃業する者が続出した。

彼等に止めを刺したのは御一新だった。公儀が瓦解した以上、参勤交代などもはや無用の長物である。辛うじて絵巻物の中にのみ残る運命となった。

鈴木勇三郎も、ほとほと困ったようである。が、いい思案も浮かばないので、やむなく江戸の店を畳み、一家は大坂へと移ってきた。それだけでも難儀だったろうに、勇三郎には人望があったため、東海道の奴人足たちが大勢くっついてきた。あの元締ならなんとかしてくれる、と縋すがりついて離れなかったらしい。

縋りつかれたほうは、頭を抱えたに違いない。人情として突き放すに忍びず、さりとて連中を食わせてゆく仕事は、そうおいそれと見つかる筈もないのである。一時は元締の家族もお粥かゆを啜すすっている、という噂だった。

だが、鈴木勇三郎は才覚に富んだ男で、突拍子もないことを考えだした。それは大名行列の典礼式事を、浪花の葬式に取り入れる趣向だった。およそ常人の捻りだせる知恵ではない。

大名行列と葬式……この二つには、もともと何の関係もないのである。旧幕中なら、こんな思いつ

きを喋っただけでも、身が危うくなっただろう。が、すでに御代は明治、憚る相手はどこにもいない。もし両者をうまく結びつけることができたら、大名の抱え奴や道中の駕籠舁き連中の特技を生かせる。打ち捨てたまの伊達道具も、そっくり使える。これやーと勇三郎は膝を叩いたそうだ。

大坂というところは、七割方までが真宗である。旧幕中の葬儀はまことに地味なもので、同行衆が祭壇道具を素禪屋から借りてきて、簡単に式を済ませた。同様に野辺送りも、夜提灯を掲げた者が先頭に立ち、あとは坊主一人に駕籠が四つか五つの粗末な葬列が続くだけだった。

鈴木勇三郎の狙いは、この葬列を華美なものに作り変えることだった。そうするためには、坊主を大名になぞらえて、大掛かりな僧侶行列を仕組むのが、一番手っ取り早い。折も折、世に吹き荒れている廃仏毀釈の嵐のせいで、神道の隆盛とはうらはらに、どこの寺もさっぱり意気が上がらない。一声掛ければ、二つ返事で乗ってくるだけの素地は充分あった。

その読みは、明治も七年を数えるようになっていま、どうやらかの中した、といえそうである。坊主たちには何もしてやらなくても、衣に袈裟は自前で駆けつけてくる。道中奴や駕籠舁きの連中は、己れの技倆が再び役に立つとあって、随喜の涙をこぼして働く。伊達道具を造る職人たちも、東京から続々とやってきた。

仙喜社が真先に売り込もうとしたのは、何よりも見栄を重んじる役者や遊侠の徒たちである。これもまんまと図に当たり、彼等は互いに張り合って、豪華な葬儀を営むようになった。更に、いまやこの慣わしは、金持の商人から大物の政治家にまで拡がろうとしているが、それが今度は目先を変えて咄家ときた。面白い相手である。どんな葬礼かは知らんが、きつと巷の評判を呼ぶこっちゃろ。

勇三郎の成功を見て、昔ながらの素禪屋、駕籠屋、医者陸、諸人足の口入屋たちは、争って仙喜社へ出入りするようになった。いまからなら新参だが、幸いにも山田屋の場合は、ごく初期のうちに源兵衛が道具を貸していた。その因縁で、大なり小なり仕事があれば、勇三郎は必ず声を掛けてくれる。

千日墓所がさびれたいま、重助はこれから生きてゆく道を、仙喜社の商運の中に見出そうとしていた。さしあたっては、これといった思案もないし、その上で、別の潮時を待つつもりだった。

仙喜社は立て混んでいたが、山田屋を名乗ると、すぐに上へ通された。

「いつもお世話になつとります」

「ああ、ようきてくれた」

江戸暮らしが長かったせいで、勇三郎の大阪弁は少々抑揚がおかしい。

「あしたの葬礼は、変わった趣向でやらはるそうだな」

「それより、義父^{おやじ}さんはどやねん？ このところ、ちょっと顔色が勝れんようやが……」

「へえ、おおけに、別になんとも言うてはおりまへんのやが、どうもすぐに疲れるみたいだす」

「そら、いかなあ」

自分で話を受けておきながら、源兵衛が養子を寄越したのは、そろそろ代を譲ろうとの思惑もさることながら、身体が弱ってきたなによりの証拠だろう。元気な頃なら、こう簡単には重助に任せなかつた筈である。

「一年ぐらい前から、急にしなびてきたよに思います。今度の話でも、わしゃ文枝師匠より二つ齡上やいうて、しばらく考え込んだりしました」

「そりゃ、よくねえなあ……とはいうものの」

勇三郎の口調は江戸弁になった。「隠居に奉つちまって、あんまり大事にしすぎるのも考えものだぜ。かえって、老けちまうからな」

「へえ、無理のいかに働いてもらお、思ひります」

「お義母^{おつか}さんはどうだい？」

「へえ、いま心安い女同士で、伊勢へお参りに行つとります。義母ははおやのほうは何事があつても、へたばる心配はおまへん」

「あつはつは、結構なこつた」

「あの元氣は、わてが分けてほしいくらいですわ」

「こつちもあやかりてえな……おめえさん、いくつになつた？」

「二十九になりました」

「ほうそうかい……それなら、いつ山田屋の看板を背負つて立つても、おかしくはねえな」

「未熟者ではおますが、よろしゅうおたの申します」

「そいつあ、こちとらの言う科白せふだ。こと葬礼さうりについてちゃあ、おめえさんのほうが兄貴分じゃねえか」

「何をおっしゃいますやら……」

「さて、あしたの話といこ……」

そこで勇三郎の口調は、急に大阪弁に戻つた。「全部山田屋に任したいとこやけど、お互いに飯の食いかねる御時勢や、通夜のほうは桶長かづなに頼んでん。これは辛抱してんか」

「へ、それは無理もござりまへん。印形寺はんのほうをやらして頂くだけでも、有難いこつておます」
桶屋長次郎は同じ千日で素樸屋すばくやをしている男である。商売仇だが、鈴本の旦那さんにこう出られたら、引き下がらなしゃあない。

「まあ、待てば海路の日和ひわありや。そのうち景氣も戻ってくるわいな……ところで印形寺のほうやがな、ああでもない、こうでもない、と散々揉めた挙句あげくに、ようよう形がついてきたわ」

桂文枝は名人肌の咄家うたかだっただけに、ほとんど蓄えは残していなかった。そこで、文枝の弟子で四天王といわれた文之助、文三、文都、文団治たちは、諸方を駆けまわつて費用を工面してきたが、そ

れでも充分とはゆかず、思案投げ首の態だと聞きつけて、仙喜社が助け舟を出した。

浪花の地へきてからの勇三郎は、忙しくて寄席へ足を運ぶどころではなかったが、江戸にいた頃には可楽や柳枝、梅枝や田朝の咄をよく聴いていた。もう少し氣持のゆとりが出来たら、せめて上方の落とし咄ぐらいはゆつくり愉しみたいので、力を貸すことにした。もちろん儲かりはするまいが、山田屋に迷惑はかけない。

故人が生前に洩らしていたところでは、あんまり眞面目な葬礼はしとうないな、とのことだったので、読経なんかやめといて、いっそお囃子入りでいこやないか、と弟子たちが言い出した。幸い師匠の後家の承諾も得たので、印形寺へ話を持ち掛けてみると、住職がまたサバけた御仁で、あっさり引き受けてくれた。ただし、まるつきりお経なしではグツ悪い、なるべく簡単に切り上げるよって、焼香の折に鳴物を入れとくなはれ、ということになった。焼香が済んだあとは、弟子中最年長の文之助が、霊前で『三十石』を一席伺うて手向けとする。

「あっはっは……」

商談中の素禪屋は、笑ってはならぬとされているが、これには重助も吹き出してしまった。こんな葬礼、見たことも聞いたこともない。

「咄家に太夫元、親類縁者に席亭の主、それに晶屑筋まで入れたら、四、五百人にはなるで」

「葬礼行列のほうはどうなんもんだす？」

「いまのところ八カ寺つけて二百二十人前後でいくつもりや」

「大名の格式でいったら、尼崎の殿さんぐらいのもんだっか？」

「なかなか、十万石以上や……桑名藩松平家、淀藩稻葉家ちゅうとこやろな」

「へえ、咄家も出世したもんだんなあ」

「なんし桂文枝の葬礼やさかいな、それぐらいは当然やろ……性根入れて頼むで」

「呑み込んでります」

「ところで、今度はおめえさんに遠見をやってもらいてえんだがな……どうやろな？」

勇三郎の口調は、江戸弁と、大阪弁のチャンボンになった。これは商売ではなく、男の頼みだ、と言いたげな表情だった。

「旦那さん、それは無理だすわ……わては行列なんか、やったことおまへんがな」

よくは知らないが、大名行列の先頭をゆく遠見は、気疲れのする仕事だと聞いている。不意の伏兵に備える心構えはすでに必要なにしても、途中で邪魔ものが入ったら道順を変更しなければならなし、伊達道具の扱いから歩きぶりに至るまで、色々とむづかしい作法がある筈なのだ。

「いや、それは氣イ遣うことないねん。遠見はもう一人つけるさかい、万事そいつにまかしといたらええ」

桂文枝は大阪の咄家や、生粋の浪花者が先導すれば、安心して成仏^{じょうぶつ}でけるやろ、と勇三郎は言った。ことに故人が、千日で灰にしてほしい、と口にしていた以上、一番ふさわしい男に頼みたい。となれば、山田屋の藤原重助をおいて他に誰がよいよう。

「そうおっしゃって頂くのは、身に余る光栄だっけど、仙喜社はんの面汚しになったらえらいこつてんがな」

「そんなことは、全然気にせんでよろし」

勇三郎は手を振って、極端に声を落とした。「ほんまのどこをいうと、うちのほうもかなりええ加減なもんやねん」

僧列が喪家に出入りする時、遠見から曲長柄^{まがえ}までの伊達道具持ちたちは、宰領の合図によって一斉に掛け声をかける。が、実のところ、これはとんでもない瞞着^{まんしやく}なのだ。本来の大名行列では、主君の帰国を寿^{ことほ}いで「久々のお国入り目出度いな」と歌うのだが、この通りやったのでは、到底葬礼には似